

本棚の整理をしていたら、懐かしい本を見つけた。ミヒヤエル・エンデの『モモ』だ。二人の娘が幼い時、主人公のモモのように勇氣と決断力と行動力を持った女性に育ってもらいたい、と寝る前に少しずつ読み聞かせた本だ。その頃を思い出して本を手にとってみると、一枚の写真が挟まっていた。二八年前の雛祭りに、生後六か月の長男、十歳の長女、六歳の次女が雛人形の前で満面の笑みを浮かべている。この本を一人で読めるようになった子供達の誰かが、栞代わりに挟んだまま忘れていたようだ。あつという間にその頃の記憶が蘇り、幸せ一杯の気持ちに包まれた。その頃の私は、仕事と子育てで毎日時間に追われ、三人の子供達を「早く。早く。」と追い立てていた。でも、子供達は私を慕い、私に沢山の愛情を捧げてくれた。沢山の宝物をもらっていたのに、それを胸に抱いて深く味わい、子供達に感謝を伝える余裕もないままに、慌ただしい子育ての時期は終わってしまった。幸い夫の理解と協力、周囲の支え、そして何よりも子供達の努力のお陰で、現在三人の子供達は家から遠く離れて立派に自立して、それぞれの人生を精一杯に生きている。

ほんの短い時期ではあったが、子供達はそれぞれ私の愛を求め、私にたっぷり愛を贈ってくれた。その時間の思い出こそが私の一番の宝物なのだ、と今になってしみじみ思っている。そして、いつも私を支え励まし、子育てを一緒に楽しんできた夫との三八年間の思い出も大切な宝物だ。そう言えば、時間泥棒と闘い、町の仲間達の大切な時間を取り戻したモノの宝物も、『時間と思い出』だった。

これから私は、三人の子供達から貰った宝物を大切にしながら愛する夫と一緒に時間を心から楽しみ、幸せな思い出を沢山作っていききたい。その思い出が、又二人の宝物になって、二人の人生を豊かに美しく彩ってくれるに違いない。幸せに生きる両親の姿が、いつか子供達の宝物になることを願っている。